



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〜第二〇一号〜

穀雨こくう

四月二〇日

## 西の伊勢参り、東の奥参り

先日、山形県から飛行機に乗って伊勢参りに来た二十代から三十代の女性たち四十人ほどをお迎えしました。頭に白い頭巾、足元は脚絆きゃはんに地下足袋の白装束姿です。前日に山形県の出羽三山で修行を行った山伏の装束なのでした。

山形には、「西の伊勢参り、東の奥参り」という風習があるそうです。

「奥参り」は、羽黒山はぐろさん（標高四一四m）、月山がつさん（一九八四m）、湯殿山ゆどのさん（一五〇四m）の出羽三山に参ることで、とくに関東方面では、重要な人生儀礼として位置づけられ、登拝した人は一般の人とは違う存在として崇められたといえます。

西の伊勢神宮に対して、出羽三山を東の奥参りと呼び、一生のうち一度は東西の参拝をなすとげなければならぬと江戸時代にはいわれていました。

三重県内では、「〇〇参らば、片参り」といって、伊勢参りとほかの神社をセットで参る習慣もありますが、江戸時代、流行した伊勢参りは全国の聖地とも結びつけられていたのです。

三重県出身の俳聖、松尾芭蕉も元禄二年（一六八九）に江戸を出て、東北、北陸と巡った「奥の細道」紀行で、この出羽三山を登りました。

涼しさやほの三か月の羽黒山（羽黒山）

（月山）

雲の峯幾つ崩て月の山（湯殿山）

（湯殿山）

三つの山で詠んだ句からは、その感激がうかがえます。

芭蕉は、岐阜県の大垣で「奥の細道」を終えると、その足で伊勢神宮の遷宮を拝しています。なぜ芭蕉は、伊勢へ向かったのか、「西の伊勢参り、東の奥参り」を成し遂げることもあったのかもしれない。

文 千種清美

